

手遊び歌を通して「表現」の意味と 指導についての一考察

飯 田 和 也

安 藤 昌 子

幼稚園や保育所において乳幼児が人間らしい活動をするうえで大切なことが「表現」という営みである。この表現という言葉を考えてとき、幼稚園教育要領（平成元年3月15日告示）の中の第2章 ねらい及び内容の表現には「この領域は、豊かな感性を育て、感じたことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点から示したものである。」と記述され、さらに、ねらいには「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」といったように整理してある。前の幼稚園教育要領における領域も6つに分けられ子ども自身が身につけていくことをねらいとしていたが子どもの活動が望ましいものになるように指導する傾向が強かった。そこでは上手に歌わせたり、踊らせたり、描かせたり、話させたりさせることが保育だという考えに近かった。そして、保育の方法として歌う技術を高めることにとらわれたり、絵の描きかたを上手にさせることを中心にした保育のため子どもの様々な発達をとらえることが偏っていたということの反省からも表現の領域として見直されたのであった。

表現の意味として、自分が心の中で感じたり、思ったことを何かに置き換えて表すことが大切である。その何かに置き換えることが歌であったり、絵であったり、踊りであったり、言葉であったりするということである。表現が子どもの発達にとって基本的なひとつの意味として大切であることはいままでもない。しかし、表現そのものが単独に成り立つものではなく周囲にある物的、人的、様々な雰囲気との触れ合いとからみあっている。表現の部分だけが発達するというのではなく他の部分と様々にからみあって発達をしているのである。保育の場面では他の部分と多面的にからみあって表現の部分も発達しているということである。しかし、過去の保育の方法の中では音楽は音楽だけをとりあげ、絵画は絵画だけを発達させるといった発想であった。そのようなひとつの側面だけが発達するというのではなく人間として幅広い発達ができるためにも表現のとらえなおしたいという

考えで今回の研究を試みた。

保育場面の中で「手遊び歌」を通して様々な発達がみられる。K幼稚園の保育場面の中でいくつかの「手遊び歌」を観察し言葉、環境、表現としての発達の側面と発達に対しての指導のあり方を考察する事例研究とした。さらには、保育科の学生として一年生と二年生の「手遊び歌」に対する意識調査を実施し分析を試みることによって将来保育者としての手遊び歌に対しての意識を理解することにより保育科の講義や演習を行う際の参考にしたい。

「手遊び歌」は、幼稚園や保育所において日常の保育場面ではほとんど毎日使用されている。乳幼児にとって「手遊び歌」を歌うときは、周囲にいる友達や保育者と一緒になって楽しい一時を過ごすことであり、コミュニケーションの時でもある。「手遊び歌」の中には、音声による音楽表現を味わったり、歌詞の抑揚を楽しんだり、言語による社会的知識を獲得することも見られる。また、身体表現としての身振りや手先の動作から表現の「ねらい」や「内容」を満たすのにふさわしいひとつといえる。

K幼稚園で行われている「手遊び歌」を観察することによって「表現」とのかかわりがどのような意味をもっているか。また、保育者として「手遊び歌」をどのように理解し、さらに、どのような援助を試みているかを分析したい。

「手遊び歌」は、主に身体的には上半身を使用していることが多く見られる。特に、手指の機能発達を促したり、言葉の獲得に役立ったり、人とのかかわりを助けたりすると言われている。保育者は「手遊び歌」をいつでも、どこにいても、人数にこだわりなく、道具を使用しなくても実践可能な身近な保育の教材として使用している。「手遊び歌」の多くは、歌詞の内容を発展させたり、変化して使用することが出来る。その結果、乳幼児が互いに手をつないだり、肩を叩いたり、名前を言い合ったり、肌と肌との触れ合いも可能となる。また、曲によってはテンポや強弱の変化も可能であり、歌い方によっては全身的な身体表現にも発展させることが可能となる。

このように「手遊び歌」は保育の場面の中で様々な方法によって発展させることが可能な遊びのひとつといえる。しかし、保育者の「手遊び歌」の認識の仕方によっては、乳幼児にとっては楽しい保育場面となったり、手遊び歌を歌う時は嫌いといった気持ちを持たせてしまうこととなる。

I 保育科学生の意識調査

手遊び歌についてのアンケートは1年生170名、2年生133名に実施した。時期としては、1998年6月とし1年生は教育実習や保育実習を体験していない時期であった。2年生は教

育実習としてまとめの時期であった。

アンケートの結果

- ・ 1 「あなたの知っている「手遊び歌」の曲数は何曲ですか。

1年生・・・平均すると一人あたり 8.94曲

2年生・・・平均すると一人あたり 23.20曲

『30曲以上知っているとした学生は、29%、また、40曲以上知っているとした学生は、5%であった』

- ・ それらの曲の入手先はどのような所からですか。

学校の講義を通して

1年生・・・平均すると一人あたり 3.06曲

2年生・・・平均すると一人あたり 11.36曲

友人、知人から

1年生・・・29%が一人あたり 3.00曲

2年生・・・全員が回答しており、一人あたり 4.50曲

集まり、集会などで

1年生・・・69%が一人あたり 2.16曲

2年生・・・62%が一人あたり 3.80曲

実習先で

1年生・・・0人（まだ、実習をしていない）

2年生・・・75%が一人あたり 3.20曲

自分で本を購入して（ここでは曲数ではなく人数を調べた）

1年生・・・4%

2年生・・・42%

その他（なんらかの機会を通して）

1年生・・・68%が一人あたり 4.30曲

2年生・・・23%が一人あたり 3.20曲

手遊び歌を知っているという曲数は、当然2年生が1年生よりも多く、講義で知る機会が一番多く、次いで友達や知人から教えられていることが理解できる。また様々な集会の場からも入手している。1年生は講義の科目の開講に左右されるが様々な機会でも入手している。2年生では学校や集会、友達からとただだけでなく自分で手遊び歌の本を購入して入手している。このように1年生と2年生における手遊び歌の入手先が多少差がある

が学校の講義や演習の中で多くを入手していることを考慮して講義や演習の中で手遊び歌に対して与え方を配慮しなければならない。

- ・ 2 「あなたが興味をもっている『手遊び歌』の曲数を3曲記入してください。」という質問をした。回答の中の上位10曲をあげてみる。

興味をもっている「手遊び歌」

1 年生	2 年生
1 お弁当箱	ワニの家族
2 小さな畑	1丁目のウルトラマン
3 かたづけマンの歌	かなづちトントン
4 おふろの歌	小さなお庭
5 母さん母さん	ひげじいさん
6 げんこつ山の狸さん	ぶたが道を行くよ
7 グーチョキパーの歌	はじまるよ
8 ワニの家族	山小屋
9 ひげじいさん	5つのメロンパン
10 むすんでひらいて	糸まきまき

1年生と2年生が興味をもっている曲の上位の曲をとりだして比較すると、2年生は保育の場で実際によく利用している曲があげられている。しかし、1年生は実習前ということで一般的な曲に対して興味をもっているということが理解できる。

- ・ 「あなたは保育の実践において「手遊び歌」は必要だと思いますか。必要と思う人はその具体的な理由、思わない人もその理由を記入してください。

1年生の回答より

- ・ 子どもとのコミュニケーションの手段である。
- ・ 楽しく色々なことを覚えたり身に付けたりできる。
- ・ 歌いながら楽しめる。
- ・ 手指、脳の発達。
- ・ いつでもどこにいてもできる。
- ・ リズム感を養うのによい。

- ・楽しく行動できる。
- ・表現を豊かにする。
- ・子どもを保育者の方にひきつけることができる。
- ・実習に役立つ
- ・園にいったから役に立つ。
- ・雨の日につかえる。
- ・たくさんの手遊びを知っているべきだ。

2年生の回答より

- ・子どもが集中する。
- ・皆で楽しむコミュニケーションである。
- ・導入として。
- ・手、指、脳の発達の助け。
- ・子どもの心を明るく楽しくさせるため。
- ・余った時間をつなぐ。
- ・リズム感がよくなる。
- ・数字、動物の特徴を知ることができる。
- ・言葉、歌を楽しく覚えることができる。
- ・子どもは手遊びが好きだ。
- ・雰囲気盛り上げたり、作り直したりできる。
- ・子どもとのかかわりが深まり、一体感がある。
- ・静かにさせるとき。
- ・場所や時間にとらわれずにできる。
- ・自分たちで応用できる楽しさを味わえる。
- ・雨の日につかえる。
- ・泣いている子が泣き止む。

以上のような1年生と2年生からの回答が得られた。この結果から1年生は実習を体験していないために「手遊び歌」に対しての必要性が2年生とは異なっていた。子どもと実際に手遊びをしていないためにどのように保育のうえで役立つかが把握できていない。しかし、実習や保育をするうえでは役に立つからと理解をしている。2年生は、実習体験があるために数字、動物の特徴を知ったり、言葉や歌を楽しく覚えるのに手遊び歌は必要であると具体的な回答が得られた。また、保育者が手遊び歌を実践している現場を見ている

ために、子どもとのかかわりが深まり一体感があり、さらに与えるだけでなく自分で応用できる楽しさを味わったりできるからと実習の体験により手遊び歌に対して具体的に把握している。1年生では「子どもとのコミュニケーション」を必要としているが2年生では「皆で」といったように自分を含め楽しく、コミュニケーションできるといったことをあげているのは実習や保育の現場を観察しているから回答できることと思われる。1年生と2年生の共通に必要としているのは、手遊び歌を通して、子どもたちを自分の方に引き付けたり、集中させ静かにさせたり、雨の日にも利用できるといった保育の方法において必要と感じている。

このように1年生と2年生のアンケートによる回答から保育者の養成校における「手遊び歌」の指導は表現の領域の「ねらい」と「内容」に結びついた教材として与えながら実習体験の前と実習後との意識の違いを把握する必要があるとみられる。ただ曲を教えればいいといった与え方ではなく、子どもの発達にふさわしい言葉かけを通して手遊び歌を楽しんだり、味わったりさせたり、説明をする時に発達をおさえた仕方や歌い方といったことを教材に応じて工夫するということである。1年生に与える場合と実習体験している2年生に与える場合は当然異なっている。幼稚園や保育所の規模、地域の実態、季節を考慮したり、子どもの年齢や能力、人数の違いによって「どのように説明したり、歌って示すか」といった講義や演習が必要となる。また、アンケートの回答の中で、手遊び歌を与えることが子どもの発達に影響をするといった考えが無かったという点を取りあげなければならない。表現のねらいには、創造的で豊かな感性を身につけ、様々な方法で表現しようとする態度を養うという視点がある。これらは子どもたちの発達を大切にすることによって学生がこのことにふれていないということが問題である。保育の場で子どもたちを静かにさせたり、知識を与えるだけでなく、一人ひとりの発達のために手遊び歌を通して触れ合うということに気付いていないということを取り上げなければならない。今後の課題のひとつとして講義や演習の中で幼児の発達を助長するためにも手遊び歌を学生に与えるときには考慮することのひとつである。

II K幼稚園における手遊び歌に対する取組から

K幼稚園は、キリスト教主義による保育を実施しており、年長児16名・年中児20名・年少児9名で園長、主任、教諭2名、非常勤1名からなりたっている。

保育者に対するアンケートと手遊び歌の実践観察、さらにビデオで記録をして手遊び歌に対する取組みから表現について考察をした。

1 K幼稚園での手遊び歌のストックは35曲あり、入園式やイースターあたりでは「たまご・たまご」を与えている。与える根拠は、単純でかわいい、また、卵から生まれるというスタートの意味もある。4月には「たけのこ」の曲をあたえている。その根拠は春の季節にふさわしい。また、花の日には「小さな畑をよくたがやして」の曲を与え種を植え、育ち、花が咲くことを考える。といったようにこのK幼稚園ではとりあげていた。

2 保育の実践における「手遊び歌」を必要性、目的等からどのようにとらえているかを質問した。

絵本、礼拝の時等、静かにさせるための子どもの集中を得るためきっかけの一つ。身体の名前を知り、命の大切さを分かる。自然の仕組みを知る。手先を動かす練習やリズム感を養ったりする。簡単な考えを組み立てる作業をする。皆で笑いあい、楽しさにひたり、心が開放される。

3 幼児の年齢に応じた手遊び歌、その曲名と使用される根拠について質問した。

年少組

「コロコロたまご」（短い曲であり、最後のおはようございますの元気な挨拶を皆で楽しむ）

「まほうのつえ」（いろいろな所に手がくっつくのを楽しむ。また、子どもたち自身が小人になり楽しむ）

「ゲーチョキパー」（ゲー、チョキ、パーの存在を知る）

「むすんでひらいて」（聴き慣れているので園に親しみがわく）

年中組

「あじのひらき」（年少の頃から好まれているが、小さなものから大きく表現したり、塩ふきの回数が増えたりするバリエーションを楽しむ）

「あわてんぼうのパパ」（ストーリー性もあり、お父さんのことを思いながら表現を考え、楽しむ）

年長組

「大工のキツキさん」（ストーリーを作って動作を増やしていく手遊びのため覚えることと、それをスピードアップさせることにより楽しさをあじわう）

「パントンチョンキラ」（パン、トン、チョン、キラ、パントンチョンキラと難しくなっていくことを楽しめる年齢である）

4 保育時間の流れの中で「手遊び歌はどのような保育の場で実践され、どれぐらい時間をかけているか」という質問をした。

保育の場では、集まった時、礼拝の前、帰りの用意の前にこの幼稚園は実践されていた。年少組は3分から5分、年長組は5分から10分実践といったクラス、年齢によって差がみられた。

年少組の保育者が手遊び歌を取り入れている考えとして、

4月の時点では、聴きなれたものやテレビで見たことのあるものを幼稚園でやったという安心感と親しみをもたせるため。クラス全員の気持ちを同じ方向にむけるため。

年長組の保育者として

集まった時に教師の方に注意を向けたい時。少し時間の調整が必要な時。子どもの気持ちを一つにしたい時。その季節や事柄に興味を抱き、楽しみたい時。

5 手遊び歌を実践している時、保育者から見た園児の反応について
手遊び歌をはじめる前

- ・子どもたちはあまり集中していない

実践している時

- ・一生懸命やっている子、知らん顔の子、ふざけている子など様々見られた。

終わってから

- ・子どもたちは教師の次にすることに注目し、集中している。

保育者A

手遊び歌をすることによって楽しさを感じる子もいるし、回りの子がやっているのを見て楽しむ子もいる。(特に年齢の低い子) 話をする時に、ただ急に話をするより手遊び歌をいれて、話し相手に対する興味や集中を持たせるために行なうことが多い。例えば、子ども同士で話している子も「手遊び歌」が始まると話し手の方を注意する。

保育者B

子どもたちは大きな声で歌いながら「手遊び歌」を楽しんでいる。最初は皆と一緒にで

きなかった子が、いつの間にか皆と楽しんでいることがある。自分の意見が取り入れられなくて口々に叫ぶ姿が見られることがある。

このK幼稚園では、季節や行事にふさわしい手遊び歌を考慮して与えていることが理解できる。例えば、イースターの時には「たまご・たまご」、花の日には「小さな畑をよく耕して」といったことに見られる。手遊びの必要性として、絵本や礼拝の時に子どもを集中させるきっかけの一つや様々な知識を与えることやリズム感を養うために必要と考えている。年少組、年長組という年齢や能力に応じた曲を考慮しているのが言葉の理解度であったり、手遊び歌の曲の長さであったり、数の概念の理解に応じて工夫していた。当然、手遊び歌を与える時間も年少組と年長組への差が見られた。また、年少組へは、4月の時点では聞きなれた曲を与えたりする配慮も見られた。保育者が手遊び歌を与える前と実践中、そして終わった時に子どもたちの集中の違いを感じているのは「手遊び歌」の効果として重要である。

Ⅲ この園での手遊び歌の事例

a 「棒が一本」（ビーム）光線について

1 起源、伝わりについて

教師の一人が行った子ども向けキャンプの中でリーダーが子どもたちに対して実施していたのを真似て取り入れた。

2 この「手遊び歌」の子どもたちの変化について

年少組

はじめて実施した時には理解できず、聴かれても自分で答えられない。2～3回と進めているうちに分かる子が半分程度で確実に示すことができる子はほんの2、3人。

年長組

ビームする対象が、年齢が高くなるにつれて難しいもの（探さないと分からないもの）になる。

3 この「手遊び歌」を使用する時の必要性及び目的について

保育者A

物を探す楽しさを感じさせたい時、何度か手遊びを楽しんだ後、最後に次の話し（例えばゲームの説明者）をする人に（ビーム）を向けて話が聴ける状態にする。（集中させる）

保育者B

室内がざわついており教師に注目してもらいたい時、保育室に親しみをもってもらうため備品に気付く。皆で楽しくものを見つける喜びを知る。

保育者C

子どもに何か見つけて欲しい時（例えば、少し忘れかけていたカブト虫を思い出して欲しい）に使う。こどもを集中させる。

4 テンポを変えた時について

保育者A

手遊び自体を楽しむ子が増える（集中を高めることができる）

保育者B

ゆっくり一定のリズムでしていると飽きてきたりする。テンポを速くすると素早く示されたものを見つけなければならないため調子に乗ってくる。

保育者C

一定のテンポで何度も繰り返していくと、子どもたちの集中力が低くなったり、飽きてしまう子がいる。テンポを変えることで子どもたちを集中させることができる。

5 歌の内容（言葉）、動作、視覚的な面からの分析

保育者A

「一本」という数は子どもにとって親しみやすい数字と単位である。「右向いて～」の間に子ども自身いろいろな物を見ることができる。

保育者B

「棒がいっぱん～」と「チャチャチャ」のリズム、フェルマータの面白さ。右、左、上、下のあることを知ること。自分もウルトラマンになったように思う楽し

さ。

保育者C

動作について、右も左も分からない子が多いので、教師は子どもの鏡になるようにしたい。

6 実践する時の子どもの反応

・「棒が一本」をはじめる前

子どもたちはあまり集中していない

・実践している時

いろいろな物を見つけようとしている。人より速く示された物を探そうと夢中になる。

「・・・にして」と希望する対象物を口々に言う。

・実践が終わってから

「ビーム」を出した物について話す。皆が一つの物を見ていることが多く、集中する。

7 「棒が一本」の実践時における園児の様々な様子について

保育者A

「机はどこだ」といっても、一ヶ所だけではなく数ヶ所も探し「ビーム」を送る子がいた。「・・・はどこだ」と言う前に希望する対象物を口々に言う子が多い。

保育者B

「右、左、上、下を向いて～」の所で大きく顔を動かしている。思わぬ子がよく物を見ているということが分かる。物を指し示すのみなので、想像力などの発展はない。何も見つけられ無い子がついてこなくなる。

保育者C

早く先生が言った物を見つけようとしている

この曲は保育者がキャンプに行き習ってきたというように様々な場所で手遊び歌が見られる。それを保育者が自分の物に取り入れようとする意欲によって保育が変わり、高まるということである。この曲は、子どもの年齢の違いによって能力の差が理解できる。また、集中させることと同時に実践のありかたによっては子どもも保育者も共に楽しめる曲といえる。子どもの知覚に対してどの程度発達しているかということ把握の上でも利用出来る。保育者や物にかかわる姿勢を高めるには最適といえる。

b 「5つのメロンパン」について

1 起源、伝わり方 手遊び歌の本から

2 具体的な変化（展開）について

年少組

年少児はまだこの歌に慣れていないので「おばさんメロンパンーつください」というところを教師と一緒に言う。また、パンの数を確認する。

年長組

買い物に来るお客さんが、ウサギ、ぞう・女の子、男の子・スカートの人、赤い服の人等、小人数になっていく。

3 必要性和目的について

保育者A

時間があいた時など、手遊びを楽しむため。自分が何に当てはまるか考えるため。

保育者B

時間が何かと何かの間である時。

4 テンポを変えるとどうなるか

保育者A

テンポはあまり変えない。「メロンパン」が「チョコレートパン」「サンドイッチ」等に変化し、その変化を楽しむ。

保育者B

テンポよりパンの種類を変えることが多い。

5 歌の内容（言葉）、動作、視覚的な面からの分析について

保育者A

パン屋に売っている物を想像できる。（ふんわりしている様子）動作自体は簡単である。「5つ」「4つ」「3つ」等、数字を手で表すことにより数字への興味をもつ。

保育者B

「おばさんメロンパンーつください」という言葉に「はいどうぞ」「100円です」等というやりとりを楽しむ。

6 園児の具体的な反応について

・はじめる前

子どもたちはあまり集中していない。

・実践している時

会話のやりとりを楽しむ。本当は「1こ」なのだが「メロンパン10こ」等といった数の言ったり、「売り切れ」に対して「作って」と言ったり、「あげる」といった姿が見られる。

・終わってから

「つぎは～パン」と言ったりして、もっとやりたい子が多い。

この曲は「手遊び歌」の本から習ったというように保育の場では、最も身近な本を利用している。幼稚園や保育所の中で参考となる本の充実が必要と言われる一つの例といえる。年少児と年長児では、イメージの豊かさが差になって表われている。保育をする上でイメージの豊かさ、感性の大切さが重要といえる。この意味で表現の「ねらい」を理解していないと子どもの発達をおさえた保育に結び付かない。必ず表現の「ねらい」「内容」をおさえて教材研究と援助のあり方を研究しなければならない。

以上のような二つの手遊び歌から、保育の中で子どもたちの注意が散っている場面で実施をすることで集中させるためには、「手遊び歌」をあたえることで効果が見られる。当然、保育者の手遊び歌を子どもたちの前で行なう時テンポを変えたり、言葉を変化させたりする技術が高く、声の大きさや音程が正しいことは言うまでもない。今回の意識調査は曲数が少なかったがa・bの二つから、子どもにとって「手遊び歌」を楽しむには年齢によって能力によって人数によって違いが見られた。このことから子どもの発達をとらえ、それにふさわしい環境構成として「手遊び歌」を与えることが保育者として必要といえる。

今後の課題

今回の研究は、事例としてK幼稚園のみということで限られた資料のために今後数多くの実践を集めて明確にしていきたい。この研究のために学生やK幼稚園の関係者の皆様には感謝をいたします。